

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.20) 2010. 8. 1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

緒言

川崎富作

暑中お見舞い申し上げます。

「夏は暑く、冬は寒い」というのが、私も日本列島の住人の長い間の常識でしたが、近年の急速な地球温暖化現象は、いつまでこのような春夏秋冬の四季ある日本人の常識が維持されるのか心配になってきます。とにかく、この暑さに負けないよう水分の補給に努めて、睡眠不足にならないよう心掛けたいものです。

さて、今回は東邦大学医療センター小児科の佐地勉教授から、示唆に富んだ原稿を頂くことができました。佐地先生には2012年2月京都で開かれる第10回国際川崎病シンポジウムの会長もお引き受け頂いております。

また、「川崎病の子供を持つ親の会」の世話人である小笠原恵子さんからも貴重な玉稿を頂きました。

そして、図らずもその「親の会」(代表：浅井満氏)が、第62回保健文化賞を受賞されるというビッグニュースが飛び込んできました。浅井さん達の長年に亘る地道な活動が認められて、こんなに嬉しいことはありません。おめでとうございます。

(当センター理事長)

ニュースレターNo.20をお届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。

「川崎病の Rule」

佐地 勉

川崎病には何故か通常の医学的ルールに照らし合わせてみて奇妙な点が沢山あります。

昨年5月、我が国での第1例の発症を機に、新型インフルエンザ(A/H1N1)が日本の医療界を席卷しました。丁度私たちは、RAISE Study (研究事務局；群馬大学；小林徹先生)という前方視的多施設協同治療介入試験を開始し、IVIG 不応例を少なくする研究を全国の医療施設の協力を得て進行中でした。昨年6月、症例のEntryが軌道に乗り始めたころ、実にA/H1N1の流行に合わせて新規川崎病の登録症例が少なくなりました。何らかの影響を受けたのでしょうか。今年度発表される2009年疾患定点観測の結果が楽しみです。歴史的には、ある一つの病原体の流行があるとその他の流行はない、つまり“大きな流行が二つ重なる事はない”というtheoryが一般的です。事実、新型と古典的Fluは同時に流行しませんでした。

では川崎病は、何故”流行するが直接はうつらない”疾患なのでしょう。年間1万人以上が罹患し、同胞例・家族例があるのに、病院に入院して“うつる”子供を経験した事がなく、世界中隔離の必要がないのが川崎病の特徴です。同胞例における1～2週間間隔の発症のtime gapは一体何の期間なのでしょう。

さらには、**原因のある川崎病**が幾つか報告されていることです。因果関係が疑われる予防接種後、熱傷後、ある種の感染症後（TSST-1,連鎖球菌や EBV 感染や新しいウイルス、最近話題の腸内細菌など）などです。では明らかな原因のない“真の川崎病”、特発性川崎病と二次性（続発性）川崎病は、病態が違うのでしょうか？

感染症が直接影響していないのなら、**何故季節性があるのでしょうか？**気管支喘息や一部のアレルギー疾患の様に自律神経にそれほど影響されるのか？また一部では、ANCA 陽性であり、また一部では低補体血症を示すのは何故でしょうか？

もうひとつ、生後数日からの発症例があることです。まだ一度も外出していないはずの一人っ子の新生児で、家族内感染症のない環境で、しかも母体免疫のある時期です。

また肝機能障害は、**何故第二病日に既にALD>ASTに逆転しているのでしょうか？**

はたまた、何故若くして**冠動脈の石灰化が後遺する**数少ない疾患なのでしょう。冠動脈石灰化を示す疾患は、冠動脈硬化症、糖尿病冠動脈障害、血液透析症例、腎移植症例、bone mineral density の低い人、その他稀に先天性 HSV 感染の一部です。PTH や女性ホルモンの異常も研究されています。何故、PCI でロタブレーターがスタックする程の強烈な石灰化なのでしょう？

一般に、医学を科学的に解析する時、ある種の疾患を“病態”から**考察する**時は、①循環障害(虚血、血流障害など)、②炎症(感染症か非特異的炎症か)、③変性(線維化、変性、ホルモン・代謝異常など)、④腫

瘍(悪性か良性か)、⑤先天異常(血液学的欠損か、遺伝子異常か、形態異常か)、⑥物理的障害(外傷・事故)、そして医学的・科学的に疾患の成り立ちに不自然さや理屈に合わないところが多いとき、最後に忘れてはいけないのが、⑦なんらかの中毒です。学生には「いつか奇妙な症例に出くわした時のために“毒素”を頭の片隅に置いておけ」、と口をすっぱくして言っています。O-157 による HUS、蜂蜜による新生児ボツリヌス、お祭りのカレーライス事件も、毒入りギョウサ事件も、そして水俣も何らかの toxin が体内に侵入したあとの一連の出来事の完成像です。

川崎病は、急性で、熱性で、CRP、WBC、TNF- α が上昇する疾患で、一瞬の非黄疸性肝機能障害があり、新生児から学童まで幅広い疾患年齢に及び、成人期に殆ど無く、炎症後に強い石灰化を残し、流行するがうつらない疾患が本体のようです。軽症例では、一過性に終息してしまう“tiding over”の経過を示す病態です。NSAID, IVIG, ステロイド、抗 TNF α 製剤も効きます。

この疾患を、時には違った視点から、極端な観点から、また非常識的な発想から approach するべきなのかな、とも考えますが、若手の研究者の先生方には受け入れられるでしょうか。これまでの、“川崎病は冠動脈瘤を合併する全身性の血管炎”とせず、例えば側頭動脈炎のように、“頭を除く全身の動脈炎を伴う特異的冠動脈炎である”と逆に考えたとき**“仮説の検証”**は違った意味合いを持たないのでしょうか？

最後に、このような自由な発言のスペースと機会を与えて頂き、また非科学的な発想をおゆるし頂いてきた川崎病発見の父、

川崎富作博士と、そしていつも暖かい励ましのお言葉を頂戴する賢夫人に深甚なる謝意を表します。(平成二十二年夏岩手にて)
(東邦大学医療センター小児科)

写真：7月17,18 東京で行われた国際小児難病フォーラム 2010 (東京慈恵会医科大学主催) で、Stevenson 教授 (Stanford 大学新生児学) と歓談される川崎先生ご夫妻。



せせらぎ会 (日赤川崎病の子供をもつ親の会) と共に 小笠原恵子

私は現在「川崎病の子供をもつ親の会」(「親の会」)の世話人をしております。「親の会」は、1982 年秋、川崎病が大流行した年に発足しました。「親の会」は今有名ですが、同じ頃、もうひとつの親の会が誕生していました。「日赤川崎病の子供をもつ親の会」です。日赤にカルテのある川崎病の子どものお母さんたちが立ち上げました。通称を「せせらぎ会」と言い、会報「せせらぎ」(題字：川崎先生)には“幼い血管の中を流れる血液がいつまでもよどみなく、たえまなく、やがて、力強く流れてくれます様に”との切なる祈りが掲げられています。



私の息子は 1983 年 1 月、1 才 1 ヶ月で発病。緊急入院した病院では、付き添いは患者のベッドで一緒、朝食はどんぶりご飯に納豆、日中は入れ替わり立ち代り若い医師が来て「肝臓は?」「目は?」と覗いたり触

ったり。とても耐えられえず転院したのが日赤医療センターでした。長時間待っていたと知った川崎先生は「どうして言わなかったの?先にしたのに…」この時私は始めて泣きました。それから病棟へ。明るい部屋、小さなベッド、かわいいパジャマ…。まさに天と地の差。ここで医療講演会や相談会、懇談会等を積極的に行っていた「せせらぎ会」を知り入会。その後、「せせらぎ会」のお手伝いを依頼され、息子は後遺症もなく元気だからこそ、「私に与えられた最も納得できるやるべきこと」だと思い引き受けました。

川崎病の情報があまりなかった時代、「せせらぎ会」は貴重な情報源であり、不安や悩みを共有でき、母親同士の心安さがありました。川崎先生を始め、小児科の先生方、看護師さん、子どもたちを世話する病院ボランティアグループの協力体制があり、当時としては画期的なことだったと思います。

「川崎病に罹った我が子と、すべての川崎病の子どもたちのために」を合言葉に、活動は 23 年間、日赤にしっかり根を張って続

きました。気がつけば活動を続けることで私自身が支えられていました。これは活動を共にして来た皆さんの感慨でもあると思います。

5年前に「せせらぎ会」は有志 23 名によるボランティアグループに変わりました。1月には川崎先生、菌部先生をゲストに手作り料理持ち寄りの新年会。6月川崎病研究

センターの総会手伝い、夏は心臓マッサージの受講や復習、秋は親睦会。メンバーのほとんどが還暦を過ぎ、病気、介護、仕事、あるいは孫、様々な相手との日常を送りながら活動も続けています。川崎病の原因究明と、命を失う子どもがいなくなることを心から願って。（「川崎病の子供をもつ親の会」）世話人



(新年会：日赤医療センター会議室で)

事務局から

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数 280】平成 22 年 7 月末現在
[正会員：108 名、3 法人、5 任意団体]：[賛助会員：160 名、3 法人、1 任意団体]

【研究会・講演会】

- ★ 第 10 回北海道川崎病研究会 平成 22 年 9 月 25 日 (土) 14:30～ 於:KKR 札幌
代表世話人:濱田勇先生 (札幌徳洲会病院小児科)
- ★ 第 30 回日本川崎病学会 平成 22 年 10 月 10-11 日 (金・土) 於:国立京都国際会館
会長:濱岡建城先生 (京都府立医科大学小児科)
- ★ 第 27 回関東川崎病研究会 平成 22 年 11 月 27 日 (土) 15:00～ 於:日赤医療センター
事務局代表:今田義夫先生 (日赤医療センター小児科)
- ★ 第 35 回近畿川崎病研究会 平成 23 年 3 月 5 日 (土) 13:00～ 於:テイジンホール
会長:坂崎尚徳先生 (兵庫県立尼崎病院小児循環器内科)
- ★ 第 31 回東海川崎病研究会 平成 23 年 6 月 11 日 (土) 14:30～ 於:愛知県医師会館
地下 1 階「健康教育講堂」 当番世話人:原紳也先生 (トヨタ記念病院小児科)
- ★ 「川崎病の子供を持つ親の会」問い合わせ先: Tel:044-977-8451 浅井 満

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター
〒101-041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.1) 2001.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター